



テキストを語る：『都市・地域観光の新たな展開』【大阪市立大学教育後援会顕彰2021年度優秀テキスト賞受賞】

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学 高等教育研究開発センター 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天野, 景太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000845

＝ テキストを語る Textbook Review ＝

テキスト：安福恵美子・天野景太『都市・地域観光の
新たな展開』古今書院、2020年10月

科目名：観光研究入門・観光と文化

担当教員：天野景太（大阪公立大学文学部）

特記事項：大阪市立大学教育後援会顕彰2021年度優
秀テキスト賞受賞

1. 逆風？の中で「観光」の意味を問うこと

本書が刊行されたのは、2020年10月のことです。まさに世間は「コロナ禍」の真ただ中。「不要不急の外出・移動の自粛」が強く叫ばれていた時期と重なります。大学も、ほとんどの科目がオンラインでの開講となり、本書をテキストとして用いる予定であった科目についても例外ではありませんでした。そんな時代、不要不急な活動の筆頭たる「観光」を扱う本書が刊行されたことは、タイミング的には不運だったと思われるかもしれません。

本書が企画されたのは、2019年秋のこと。まだCOVID-19の足音も聞こえず、東京オリンピック・パラリンピック開催年である2020年に年間4000万人の外国人観光客の受入れを目指す政府目標が掲げられており、現実にはその目標には届かずとも、未だかつてないほどの数の外国人観光客が日本を訪れていました。大阪の繁華街では常に中国語が飛び交う光景が日常化し、彼らの旺盛な消費がもたらす観光需要にみんな浮かれていた頃です。今後のさらなる外国人観光客の増加を見据え、京都や大阪の中心部では、新たなホテルの開業予定が続々と控えていました。しかし、本書はこうした「浮かれモード」であった日本の観光地域の状況を肯定し、観光振興によるさらなる経済活性がなされる未来像を描いた内容ではなく、むしろ、そうした状況に一石を投じることを目論んで企画されました。したがって、本書の原稿の脱稿は、状況が一変してパンデミックによる緊急事態宣言が発令中であった2020年5月のことですが、基本的には当初の内容から変更を行っていません。こうしたスタンスは、本書をテキストとして用いている科目の一つ「観光研究入門」の到達目標（21世紀は「観光の世紀」と謳われ、多方

面から着目されている。このような中で、安易に時流に飲まれたり、目先の現象だけに囚われたりすることなく、総合的（幅広い視野から）、相対的（距離において）に、観光現象の本質を捉えるための原理的な考察することが出来る。）とも共鳴しています。

2. 本書の内容と特徴

本書の底流にある精神は、地域を訪れる観光客数の規模拡大を目指すことに傾倒しがちであった現代日本の「観光まちづくり」の潮流に対して、いま一度振り返り、問い直すことの必要性を示唆しようとした前書（安福恵美子編『「観光まちづくり」再考：内発的観光の展開に向けて』古今書院、2016年）を継承しています。本書はそのタイトルが示す通り、日本の都市・地域における観光を取り巻く今日的な状況について、特に観光地域のマネジメントという観点から、DMO、広域観光圏の形成、ビッグイベント、民泊、MICE、観光公害、世界遺産観光、観光防災といったトピックを取り上げながら解説・論考を展開することを主要内容としています。しかし、その立脚する視点は、あくまで観光を社会現象として捉え、現代の都市・地域観光のあり方を描き出した上で、課題を析出することにあります。とかく、観光まちづくりの「成功例」を紹介したり、観光客誘致を目指すための実践的な処方箋を指南したり、あるいは逆に、観光化による地域の社会や文化の変容を批判的に論じたりする観光関連の書籍が多い中で、それらのどちらでもない、あるいはそれら双方の観点から観光の現実を照射するスタンスで書かれた書籍は、珍しいのではないかと思います。

この意味で、本書は入門用や概説用のテキストとして、先行研究や実践事例をまとめ、解説するだけの内容にとどまっているわけではありません。しかしながら、学術論文のように、特定の研究対象について深く探求し、分析をしたものでもありません。いうなれば、この両者を折衷したような筆致が特徴といえます。

3. 観光研究における本書の意義

本書を研究書として見た場合、その着眼点や論述のオリジナリティとして、特にどのような点が挙げられるのかについて語ってみたいと思います。

第一に、都市観光について、その特徴を体系的に整理し、その今日的展開と課題を論じていることです。都市、特に大阪や東京のような大都市は、生活や業務の場として重要な役割を果たしているだけではなく、エンターテインメントの拠点としても賑わいを見せています。大阪の中心地でも大阪城や海遊館、USJ、道頓堀、新世界、日本橋などで多くの観光客が楽しみを謳歌する光景が日常化しており、都市が観光の場であることは明らかなのですが、これまで都市観光の研究はあまりなされてきませんでした。都市はコンクリートジャングルで、無機質で均質な人工景観が広がっており、また旅行といえば都市に住まう人々が地方の温泉やリゾート施設に出向くといった流動が中心であったことも、その一因かもしれません。本書第3章「都市観光総論：都市観光の社会文化論と近年の展開」では、都市観光の特質を社会学的・文化論的な視点から読み解いた上で、都市における観光まちづくりや観光政策が目指すべき方向性と課題について展望しています。

第二に、日本版DMOの展開、東京オリンピック・パラリンピックのインパクト、交通路やストーリーをベースとした広域連携の動き、民泊新法、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録、地域観光防災、といった最新の観光をめぐる動向に関して取り上げ、それらの事例を観光政策論や観光マネジメント論の文脈の中に整理し、位置づけていることです。本書第1章「観光推進機関の今日的展開」では、地域における観光マネジメントを担う主体として近年増加している日本版DMOの特徴や課題について取り上げていますが、従来の観光協会や観光案内所との対比の中で、あるいは観光まちづくりや地域主導型観光の動きとの関連の中で論じています。また、第2章「広域観光圏の形成」では、観光における広域連携の類型に、日本遺産のストーリーを介した連携やガイドウォークイベントを通じた連携といった事例も含めて考察しています。第6章「世界遺産登録と地域住民主導の観光まちづくり：古市古墳群周辺の展開」では、2019年に世界文化遺産への登録がなされた古市古墳群を擁する藤井寺市において、登録以前からのシティープロモーションの展開や、登録以後の地元ボランティアガイド団体の取り組みについて、単純に登録を礼賛する視点からではない

観光まちづくりの多様性について読み解いています。

第三に、観光がもたらす、あるいは観光にもたらされるさまざまなインパクトを考えるにあたり、(特に「withコロナ時代」における都市・地域観光のあり方を考えるにあたり) 有用なコンセプトについて取り上げていることです。「コロナショック」による環境の激変が象徴するように、観光は、特に地球規模での国際観光が展開するようになった今日、自然災害やパンデミック、政情不安や景気動向といった外部からもたらされるインパクトに強く影響されます。このような中で、SDGsへの対応を含む持続可能な観光のあり方を見据えていくなれば、俯瞰的に観光事業や観光まちづくりの「弱さ」がどこにあるのかを見極め、想定される危機に対する危機管理という視点が欠かせません。本書第5章「『観光公害』再考：環境社会学的視点からみた観光公害の捉え方」では、観光がもたらすネガティブ・インパクトについて類型化し、被害・加害構造の多層性や解決過程が一枚岩ではないことを描き出しています。また、第7章「観光振興と地域マネジメント」では、オーバーツーリズムに沸く観光地域の住民意識の実情について焦点を当てたり、自治体における観光防災の取り組みに関する最新の動向を紹介しています。

4. ふたたび、未来に向けて「観光」の意味を問うこと

いまから20余年前、巷がミレニアムの到来に沸いていた時代。21世紀には「観光の世紀」が到来することが予見され、日本も「観光立国」を目指すべく、政府の主導で外国人観光客の増加を中心としたさまざまな施策が打ち出されました。実際にその予見は的中したといえるでしょう。観光への注目は、事業者や地域だけではなく、教育（人材育成）においても同様でした。大学教育改革の流れの中で、観光学部の開設や観光に関する学科・コースの新設を行なった大学は、この20年の間に相次いでいます。歴史の長い大阪市立大学にあっては、私が観光分野の担当教員として着任し、科目名に「観光」という単語が入った科目が初めて開講されたのは、遅ればせながら2014年のことでした。

しかし、「コロナショック」以降、若者の観光産業への期待や観光への関心も薄れつつあるようで、周囲の観光系の学部・学科をもつ大学では、急速な志願者の減少に頭を悩ませているようです。しかし、このような時代であるからこそ、観光のもつ本質や、その現代的意味を大学で学ぶことの重要性は、非常に高まっているのではないかと考えています。冒頭に記したように、本書は近い将来におけるパンデミックの到来を予見して企画・出版されたものではありませんが、奇しくも変化の時代のただ中に世に問われたことによって、「未来に向けて『観光』の意味を問う」ことへのささやかな呼び水となるようであれば、嬉しい限りです。